

ネクストワン!

しばしば講演や出前授業に出かけてゆく。話の最後によく使う言葉が、これだ。元になった話はチャップリンともピカソとも言われる。真偽のほどは定かではないが、ピカソが好きなので、学生や若手研究者に彼のエピソードとして紹介している。

九十歳を超えたピカソに、こう尋ねた者があった。

「数あるあなたの名作の中で、最高傑作はどれですか？」

ピカソは即座に答えた。

「ネクストワン！」

老境にあるピカソが見せた、衰えを知らぬ旺盛な創作意欲に驚くと同時に、人間が本来もっている、底抜けに明るく前向きなエネルギーに私自身大いに勇気づけられたものである。

なぜ動物は旅をするか？

魚はどのように回遊するのか？

もう四十年以上も、魚を材料に動物の回遊行動を研究している。

これまでにアユやサケ、ハゼやウナギなど、たくさん

の回遊魚を研究してきたが、ウナギにかけた時間がいちばん長い。他の魚に比べ、ウナギの生態には謎が多かったためかもしれない。

川の魚のように思われているウナギは、実は遙か海の彼方で生まれる。はるばる何千キロメートルもの旅をして、成長のため川にやってくるのだ。そして親になると、自分が生まれた外洋の産卵場を目指して正確に戻ってゆき、卵を産んで一生を終える。

こんなにもダイナミックで、不思議がいっぱいの一生を送るため、ウナギは研究者の心をつかんで離さない。ひとたびウナギを研究すると、すっかりハマってしまうわけだ。

二〇〇九年五月、私たちはついにウナギの卵を採集することに成功した。世界初の発見である。そこはマリアナ海溝の北約百キロメートルの地点であった。

これで古代ギリシャのアリストテレス以来二千四百年も続いたウナギ産卵場の謎は完全に解明された。しかし、研究はモグラ叩きのように、一つ謎が解けると、またすぐ新たな謎が生まれるものである。

今私には、あの真つ暗で広大な海の中、どのようにして雄ウナギと雌ウナギが出会うことができるのか、なぜ産卵はあの地点でなくてはならないのか、知りたいことがたくさんできた。心の中で「ネクストワン！」とつぶやきながら次の航海に向けて準備をしているところである。



Photo by Eric Chauvet

1948年岡山県生まれ。現在、日本大学教授。東京大学名誉教授。1971年東京大学農学部水産学科卒業。2007年 日本農学賞・読売農学賞、2012年 日本学士院エジンバラ公賞、2013年海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)。著書に『ウナギ 大回遊の謎』(PHP研究所)、『うなぎ 一億年の謎を追う』(学研教育出版)、『魚類生態学の基礎』(恒星社厚生閣)、『Eels and Humans』(Springer)など多数。